

Top Interview

湯川れい子

1960 年、ジャズ専門誌『スイングジャーナル』への投稿が認められ、ジャズ評論家としてデビュー。その後、17 年間に渡って『全米 TOP40』を始めとするラジオの DJ、また、エルヴィス・プレスリーやビートルズを日本に広めるなど、独自の視点によるポップスの評論・解説を手がけ、国内外の音楽シーンを紹介し続け、作詞家としても活躍。2005 年 12 月には、音楽評論家生活 45 年、作詞家生活 40 年を記念して、『湯川れい子のロック 50 年』を出版するなど、我が国の音楽シーンにおける貢献度は計り知れない湯川れい子さんとのインタビューが実現！

「ジャズ」「エルヴィス・プレスリー」「ザ・ビートルズ」という 3 つのテーマを中心に、数々の貴重なエピソードを披露してくれた。(2007.10.29 湯川れい子音楽事務所『オフィスレインボウ』にて)

取材 & 文：加瀬正之

湯川さんが主催する「オフィスレインボウ」のオフィシャル WEB サイト
[http://www.rainbow-network.com/index_new_2.htm]



♪ ジャズとの出会い

戦前は日本にもジャズがあったと思いますが、戦中は敵性音楽でなし、戦後は私もまだ小学生で、東京は焼け野原で傷痍軍人がいて、ラジオから聴こえてくるのは当時流行っていたわりと暗めの歌謡曲や浪曲でしたから、そういう時代にジャズなんて全然なかったです、美空ひばりさんとか、灰田勝彦さんとか、霧島一郎さんとかそういう人たちの歌がヒットしていた頃ですね。それで、ハリー・ジェームス（戦争に行った湯川さんのお兄さんが口笛で吹いていた「スリーピー・ラグーン」/ 午後の入江）などの名演でも知られ、ベニー・グッドマン楽団の花形プレイヤーとして活躍した名トランペッター）をラジオで聴いたのが中学 2 年生くらいで、それから進駐軍放送を聴くようになるんですけど、高校 2 年生位の頃に有楽町の「コンボ」っていう店で初めてモダン・ジャズというものに出会ったんですね。それから高校卒業後の 1958 年くらいに『死刑台のエレベーター』（マイルス・デイビスが音楽を担当）っていう映画が公開されて、MJQ とか、アート・レイキーとジャズ・メッセンジャーズとか、ホレス・シルバーなどの人気がどんどん高くなって凄いジャズ・ブームになりました、その前には日本でもシックス・ジョーズとかいろんなジャズマンたちが出てきて、『不二家ミュージック・サロン』とかいろいろな場所でジャズが演奏されるようになった時期があるんですけど、だんだんとジャズがファッションブルで最先端に行く音楽みたいな扱いを受け始めたんですね。その時に何か一種の違和感のようなものを感じたんですね。救急車でたらい回しにされて、病院の廊下に放置されたまま亡くなって、お墓も持てなかったビリー・ホリデイとか、チャーリー・パーカーなんかが一生涯生命主張しようとしていたジャズとか、そういうところからずっと聴いて来たものですから、いきなり「ファンキーだぜ、ベイビー！」みたいな感じで受け止められることに違和感を感じて、それでちょっと違うんじゃないのっていう想いをぶつけたのが『スイングジャーナル』の最初の投稿だったんです。

♪ 『スイングジャーナル』の二回目の投稿（1960 年 4 月）で「私の選んだ人」と題してベニー・ゴルソン（ts）に触れていますが、当時他に好きだったジャズ・ミュージシャンは誰ですか？

そうですね、実は私が一番最初にのめり込んだのは、長い間評価されなかったディブ・ブルーベックだったんですね。ファンタジー・レーベルから出ていた『ジャズ・アット・ストーリービル』っ

ていうライブ盤を聴いた時に、それまで聴いたことのない音楽っていうか、本当に情景から心情まで演奏だけで見えてくるような、凄く鮮烈な印象を受けまして、それでディブ・ブルーベックとポール・デズモンドにのめり込んで行ってしまったんです。それと同時にチャーリー・ミンガスとかレニー・トリスターノとか結構好きな人たちはいっぱいいましたね。

♪ 特に印象に残っているジャズのコンサートはありますか？

まさか来てくれるとは思わなかった JATP（ノーマン・グランツ）が立ち上げた大興行団体 Jazz At The Philharmonic）が一番鮮烈でした！ 浅草の国際劇場でやったんですね。あと、アーニー・バイル劇場（戦後 GHQ が東京宝塚劇場を接收して名付けた）に出たルイ・アームストロングですね。

♪ ジャズ・ミュージシャンとのインタビューについて

アート・レイキーとジャズ・メッセンジャーズが来日した時に彼等にインタビューをして下さったというのが私の初仕事だったような気がします。それから同じ時期に MJQ が来て、羽田まで迎えに行き、白木秀雄さん（ds）と結婚された女優の水谷八重子さんの自宅で MJQ を迎えたパーティーをやるっていわれて、そこで初めて彼等へ会って話をしましたが、その頃は私自身もまだ若くて、そういう場に招かれること自体が時代的にも珍しかったですから凄く感激しました。

♪ ジャズ・ベーンシストで特に好きな人はいましたか？

やっぱりチャーリー・ミンガスじゃないですかね。レコードを聴いて好きだったっていうこともありまして、NY のビレッジ・ゲートで本当に目の前で演奏を聴いたこともあるんですよ！ もの凄いエネルギー感で、演奏そのものの凄くエネルギー感で、存在感のある演奏をしていた人でしたからね。

♪ 最近はジャズに関連した執筆活動などはされていますか？

いいえ、ないですね。私はジャズから離れて行った時っていうのははっきり覚えているんですけど、ちょうどフュージョンなんかが出てきた頃で、演奏しても背中やお尻が汗で濡れて滲んで色が変わってくるようなジャズじゃなくなって来たんですね。それで、ちょうどその頃にロックが面白くなって来たんです。60 年代の最後の頃にシカゴとかブラッド・スウェット & ティアーズという大型のロックのバンドが出て来て、70 年代にかけてめちゃくちゃロックが元気になって来て、ロックが時代を語るようになって来たんです。やっぱり私が一番音楽に惹かれる部分って、その音

楽が時代を語っていることだと思うんです。そういう意味ではジャズが一番元気のいい時代、自己主張して鮮烈な表現をしていた1954~55年の頃から聴いてしまったものですから、そういう汗の匂いのしなくなったジャズに魅力を感じなくなってしまうと、それは私はロックの方に行ってしまったんです。

♪ 最近聴いているジャズ・アルバムなどはありますか？

う〜ん、特にないですね。たまにブルーノートみたいな所に行ったりもしてんですけど、じゃあ誰が良かったって言われてもねえ…。私、チェット・ベイカーとかも好きで、他に好きなジャズ・シンガーもいっぱいいたけど、あの頃のジャズ・シンガーと比べると今の人たちのファッション性って、わざとアルマーニのスーツをカジュアルにした感じ？ 昔の一生懸命つま先立ちしてもお洒落に見せよう、お腹すいているけど必死になってシャンパン飲んでみたい、いわば上昇志向みたいな、そういうひたむきさとかカッコ良さ、男の意地みたいな部分に惹かれたので、カジュアル・アルマーニ着ているみたいなのっていうのは、暇やゆとりがあって遊びたい時にはいいんだけど、CDを買ってまで一生懸命聴くっていう気にはなれないですね。昔のジャズマンには滲み出て来る迫力とか、歯を食いしばっている意地とか、命かけている壮絶さとか、でも、それでもその表面は非常に穏やかだった、内から滲み出て来るものがあつたんでしょうね。

♪ ジャズについて再び書きたいという思いはありますか？

何かめっちゃくちゃ面白いものが出て来ればね。私はジャンルに関係なく面白いものが出て来るとクラシックでも邦楽でも何でも書きますからね。だから、琴線に触れたり、ショックを受けたりするものに会えばジャンルは関係ないと思います。私はやっぱりポピュラー音楽ってその時代その時代を生きているから面白いと思っているの。だから、誰か懐かしい人が来たから見に行きたいこともあまりないし、やっぱり今作られている音楽が一番面白いんだと思いますね。

♪ ジャズ・ブーム再来の可能性はあると思いますか？

フォーマットとしてのジャズっていうのはもう使い切ってしまったんじゃないかと思うんです。例えば、マイルス・デイビスが限りなく変化してって、ジャズはジャズの範疇で捉えられる時代の中で亡くなって行ったんだけれども、マイルスにしても、オーネット・コールマンにしても、今ああいう人たちが出て来たとしたら、ジャズっていうフォーマットの中に入っていられるかどうか分からないですよ。だから、ジャズとして盛り返すかどうか分からないですけど、そういうとてつもないアーティストがいろんなジャンルから出て来る可能性はまだまだあると思いますよ。

♪ もし湯川さんがジャズと出会っていなかったら…

夢っていうか、女の人が仕事を持つこと自体にまだモデルがない時代でしたけど、私は詩人にもなりたかったし、中北千枝子さんのような女優にもなりたかったの。それで、独立プロのオーディションを受けて、ジャズの前稿を書き始めた頃は女優だったんです。でも、画家にもなりたかったし、いろんなものになりました。中でも、投稿原稿に対してファンレターが来て「書かないか？」って『スイングジャーナル』から声を掛けられたんです。それで、書いているうちに「次は何か番組持たないか？」っていうふうには半年後にはもう忙しくなっていました。ラジオのDJ番組とかいっぱい持つようになって急激に忙しくなってきたのが1963年ですね。64年には東京オリンピックがあって初めて500ドルまで外貨が買えるようになって、初めてアメリカにも行ったんですね。あと、その頃に『7人の刑事』っていうテレビがあって、そこから出演してくれないかって話があって、それはちょうど私がジャズ評論家として人気が出て来ている時だったんです。デザイナーとか何の役でもいいしセリフがあって嬉しくてやらせて頂いて、芦田伸介さんなんかと一緒に準主演クラスの役を頂いたの。でも放送が終わって見たら一生懸命覚えたセリフって何の役にも立たなくて、一回撮影し終わったらそのセリフは意味がないんですよ。それで、私がその頃始めた仕事っていうの

はマイルス・デイビスはどういったところから出て来て、どういふバンドでどういう人の影響を受けながら今こうなっているんだみたい、一生懸命書いたり喋ったりしていたので、覚えれば覚えるほど自分の血になり肉となって勉強の意味があるんだけど、セリフを一生懸命覚えても翌日からはまた次の仕事来るまで何の意味もなくなるような女優の仕事は私には向いてないって、本当に鮮やかに分かったんです。それで、女優業っていうのはそれに専念してこそ意味があるんだわと思って、それからはお仕事頂いても「私の仕事じゃありません」ってお断りできました。

♪ 湯川さんにとってジャズとは何ですか？

何か暗闇の中で手探りしながら光明を探するような時にポツと灯った眩しい光みたいなものでした。たまたま進駐軍放送を聴いている時にハーリー・ジュームを聴いたことからジャズを聴くようになり、それで進駐軍放送からエルヴィスも飛び出して来たということで、私にとってはジャズもロックンロールも同じアメリカ南部をベースにしているっていうことだったんです。アメリカに連れて来られた黒人たちの歴史というのが非常に強く根付いていて、ロックンロールにもエルヴィスの背景にもそれがあつたのね。だから単にヒット曲を歌っている人っていうよりも、むしろ同じアメリカ南部のそういう歴史の中から出て来たんだっていうのは凄くありましたから、それでぶれずにずっと土壌が私の中にいなくなって思うんです。アメリカ南部っていう土壌が私の中にしっかりと根付いてくれていたことはとてもあり難いことです。

♪ 1971年にエルヴィスと初対面〜1973年にラスヴェガスで結婚式を挙げた際に、エルヴィスに証人となってもらった湯川さん

それまで何回も何回もインタビューを試みて、1971年ようやくラスヴェガスでエルヴィスと会うことができたんですけど、その時に有名なトム・パーカーっていうマネージャーの女房役だったトム・ディスキングというもう一人のマネージャーがいらないんですけど、その方がとても穏やかな紳士で、お会いした夜に「パーと一緒にのお喋りしないか？」って私たち日本人のグループを誘って下さって、そのトム・ディスキングさんと2時間くらいお話ししたんですね。それをきっかけにして、トム・パーカー・オフィスに私が手紙を出したり、いろいろと問い合わせをする。トム・ディスキングさんが必ず丁寧に答えて下さっているんです。それで、「73年にラスヴェガスで結婚式をしたい！」についてはその時にエルヴィスに出席してもらえないか？」って、最初はそういうお願いをしたんですね。72年の11月にハワイでエルヴィスのショーがあって、その翌年の73年に全世界に衛星中継したりした経緯から、ハワイでもトム・ディスキングさんたちに会ってますし、それでそういう図々しいお願いを73年にしたんですけど、トム・パーカーから「世界中の大統領や王侯貴族から娘が結婚するからエルヴィスに出席して欲しいなんてことを引き受けていたら、エルヴィスの5年間のスケジュールはそれだけで真っ黒になってしまう」という断りの手紙が来て、それもそうだなって思って、別にいいや、じゃあエルヴィスがラスヴェガスでコンサートをしている8月に向こうで式を挙げればいいやって思ってそれはあきらめたんです。それで、「私はこの期間にラスヴェガスに行って結婚します！」っていう手紙を出していたら、非常に粋な計らいで「じゃあ、その何月何日の夜のバックステージにあなたとあなたの結婚する相手の人とオフィシャルなカメラマンを一人ご招待します」って言って来て下さいまして、ああ、じゃあここぞ私の結婚証書にエルヴィスにサインしてもらえばいいんだなあっていうんで、それを全部写真に撮ってもらって、証人としてエルヴィスにサインをしてもらったということだったんです。

♪ エルヴィスと唇と唇で2回キスされたということが…

『オン・ステージ』の映像を見てると、エルヴィスはステージ下のファンと一人一人キスしているんですよ。いい時代だったんだなあって思うの。今みたいにエイズの心配をすることもなく、チュって触れ合う程度のキス。そういうことがまだ自然にできる時代だったんですね。私がエルヴィスに最初にキスしてもらった

のは、71 年の時で本当に短時間 10 分会えるか会えないかみたいな状況だったし、彼は非常にシャイな人で口ごもるような喋り方で、こちらが質問するとそれに対して答えてくれるようなそんな感じだったんです。それで、次にキスしてもらったのは、私が結婚した相手の目の前で、「結婚したお祝いにキスして下さい！」って堂々と目の前でキスしてもらったの（笑）。エルヴィスは何かいいいのかなあ？みたいな顔して、「すいません…」とか言いながらキスして下さったんです！

♪ 一番思い入れのあるエルヴィスのアルバムは何ですか？

思い入れがあるという意味では、「アイル・リメンバー・ユー」が入っている『アロハ・フロム・ハワイ』ですね。それから、ちょうどエルヴィスが離婚しているいろいろ苦しんでいた頃の凄いい名曲を集めた『グッド・タイムズ』っていうアルバム。アメリカ南部、メンフィスの匂いのするとてもいいアルバムです。

♪ 愚問かもしれませんが、湯川さんはどの時代のエルヴィスが一番好きですか？

ロックローラーとしての爆発力というのはやっぱり 50 年代が素晴らしかったし、60 年代はつまらない映画に縛られていたんで、歌として聴くものもそんなにないんですけど、でもゴスペルを歌っていますよね。あの 60 年代のゴスペル・アルバムっていうのは本当に素晴らしいし、70 年代はそういう個人的な苦しみとか挫折とかを味わって、シンガーとして凄いいんです。あと、69 年は私生活でも子供が生まれてハッピーで、つまらない映画の契約からも開放されて、好きなレコーディングとか、ステージ活動とかができるようになった時期で、あの 69 年という 1 年間にエルヴィスが残した歌ってまた凄いいですよ！ 私はその 69 年を「黒豹の時代」って呼んでいるんですけど、本当に鎖を解き放たれた 69 年のエルヴィスも大好きでした。万華鏡みたいに全部を通してエルヴィスっていうように、エルヴィスは成長して人生いろいろ経験していくほど歌が深くなって行ったんですね。もし 50 年代のエルヴィスだけだったら今みたいに残っていないと思うし、やっぱり 60 年代の映画、70 年代のエルヴィスがあって、その全部を支えていたゴスペルっていうのがあった。それで、エルヴィスが今に残っているんだと思いますね。

♪ 2006 年 1 月 22 日にエルヴィスの娘、リサ・マリー・プレスリーが音楽プロデューサーの男性との 4 度目の結婚式を京都で、純和風スタイルで挙げたと言われていますが、あれは湯川さんが関わっていたのですか？

いえない、私は全然関係していないし、あれは未だに謎なんです。京都って言われているけど、日本人が全然関与してないの。でも、京都で平安神宮の神主さんが来たっていうから、平安神宮までも全部調べたんですよ。京都のロータリー・クラブの上の方にもお世話になって、京都に「俵屋」っていう凄いい有名な旅館があって、そこに泊ったなんて書いてあるんで「俵屋」の女将にまで聞いて頂いたんですけど、全然その事実がないの。私はもしかしたらあれはロサンゼルス日本庭園みたいな所だったんじゃないかなあと思うんですけどね、ちょっと不思議な話…

♪ 1965 年 8 月 27 日に LA のエルヴィスの邸宅でビートルズが一度きりの会見を果たし、エルヴィスと一緒にセッションを行ったと伝えられています、あの録音は存在するのでしょうか？

いいて、写真も撮らせてもらえなかったし、録音も全然です。リビングでエルヴィスがギターを持って来て、ジョンと弾いたり歌ったりしただけで、録音は全くないですよ。トム・パーカーだって同席しなかったでしょう。だって、トム・パーカーはどこの馬の骨だか分からないようなビートルズにエルヴィスをお会わせやるだけでも上等だと思えぐらいの感覚だったみたいだしねえ（笑）。

♪ 日本のアーティストの中でエルヴィスに似たような存在感を持つアーティストはいますか？

後になって振り返ってみて、そういう意味で日本のアーティストの中で本当にこの人は凄いい人だったなあって言えるのは、やっ



湯川さんは現在 4 匹の猫を飼っているそうだ

ぱり美空ひばりさんでしょうね。本当に歌の上手さでも、絶対音感でも、表現力でも、声質にしても天性の凄いいものを持っていると思うしね。100 万人に 1 人、100 万人の歌手の中で 1 人いるかどうかっていうくらい恵まれた人で、しかもその才能を発揮できた人で、心の中の葛藤が深くなれば深くなるほど歌にそれが表われた人だと思いますね。

♪ エルヴィスに関する一番の宝物は何ですか？

うーん、それが私はないのよね。コレクターでもないし。キザなようだけど、その時その時に私の心をふるわせてくれて、たくさんの涙も笑いもくれて、プレゼントしてくれた音楽を通してのエルヴィスですね。それは、ビートルズとか、ジョン・レノンも同じで、ジョンも凄いい人だったなあと思うし、この 12 月 8 日にジョン・レノンの『America vs John Lennon』っていう映画が公開されますけど、あれを見てもう何回も泣いたし、何かサインや絵とかというものよりも私にしか分からないかもしれない、人には見えないかもしれない思い出の方が貴重ですね。

♪ 湯川さんにとってエルヴィスとは？

ちょうど幸運なことと同じ時代に生まれ合わせた、今となっては私自身の人生からどうにも消し去ることが出来ない存在。肉親でも恋人でもないけど、私自身の歴史の一部ですね。

♪ ビートルズの来日時に 4 人に会ってインタビューされていますが、プライベートで 4 人の力・上下関係などはありましたか？

それは凄くありましたね。例えば、ポールが「何か飲み物いかがですか？」って聞いてジョージに持って来させたり、ジョージに「そこのイス持ってきてあげなさい」とか指示したり、ポールが仕切ってましたね。リングは周りでウロウロして一番所在無くて、一切自分からリーダーシップを取るっていうことはなかったですね。ジョンはずっと離れてソファの端っこに座っていて、話し相手に加わってくれなくて、でもこっちをずっと見てるから私がパッと見るとブイッとそっぽを向いちゃうの。ちょっと難しい人だなって思いましたね。からかわれていたのも分かっていました。それで、まだストロボの一眼レフで写真を撮るような時代でしたから、ストロボが 4 つしかなくて、最後のストロボで証写写真として私がここにビートルズと一緒にいたっていうことを撮ってもらわなきゃならなくて、あとの 4 人はビートルズその人たちでしたから、全員で撮るわけにいかないですからね。それで、「誰と撮りたい？」ってポールに言われた時に、私は「リング！」って言ったんです。多分あの時にシャッターを押したのはポールだったと思うんですけどね。でも、もしあの時もっと音楽的にそれから先のビートルズが見えていければ「ジョン！」って言ったかもしれない。ポールは「ポール！」って言ってもらいたかったのかもしれないけど、私は「リング！」って言ったの（笑）。ジョンは後になって「あの頃のボクはビートルズに関することに関するざりしていたんだ」って、その時のことを謝ってくれましたけどね。

♪ ビートルズから絵画をプレゼントされたと聞いていますが、どのような絵だったのですか？

何枚か並べてあって「1枚あげようよ」って言われて持って帰って来ましたが、後で読売の部長さんに取られちゃって手元にはないんです。アブストラクトな前衛的な絵で、ポールの絵だったと思うんですけど、別に上手でも何でもなかったけど（笑）。

♪ 今、会ってみたいアーティストは誰ですか？

本当にじっくり話ができれば私はマドンナに会いたいですね。何て言ったらいいのかなあ…。自分の一番コアな優しい柔らかな心を幾重にも薄い布で覆って隠しているような人だから、1時間2時間会って話したって辿り着けないでしょうけど…。エルヴィスが亡くなった時に、マドンナはエルヴィスの魂が自分の中に入ってたって言っているんですね。マドンナ自身隠してますけど、本当はもの凄いいスピリチュアルな人なんで、彼女が何でマドンナって名乗って、何であんな苦しい思いをしながら、あそこまで自分の存在をキープしようとして、あんなにまで踊ることやフィジカルな力を保つことに専念しているのか、人間を信頼しているのか、彼女が本当に思っていることや感じていること、そのあたりが凄く知りたいですね。本当に凄い人だと思います。それと、歴史に残る人、ブルース・スプリングスティーンとプリンスとマドンナっていうのはやっぱり目が離せないですね。

♪ ミュージシャンとのインタビュで目掛けしていることは？

やっぱり少なくとも会いに行く時っていうのはその人の作品について可能な限り知っていないければ失礼じゃないですか。まずそれが絶対条件ですね。そこからこまでその人の心の鍵を開けさせることができるか。こちらのつたない英語でそんなことが本当にできるかっていうことに一番気を遣いますね。

♪ DJとして

最近はDJが音楽について語らなくなっちゃったじゃないですか。音楽がおしゃべりの間の彩りみたいになってしまっていることが多いけど、私は音楽を語るDJでいたいと思っています。

♪ 作家として

作詞家っていうのは注文がなければ成り立ちませんし、今の最先端を行っている歌い手さんの曲の作詞の依頼が来ることはないと思いますが、私の場合はまず先に歌い手さんが決まっています、メロディが出来ていて、それに対するはめ込みですから、

時々こういう言葉の表現は面白いとか、これはこの次何かの歌の中に使いたい世界だなあ、なんてメモはしていますけどね。名曲は時代が生むものですけど、例えば「上を向いて歩こう」とか、私の作った歌で私自身にとっての名曲、本当に後世に残すことができる歌だと思える曲がないので、何か残せたらいいなあとは思っていますね。

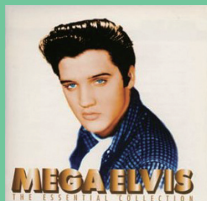
♪ 湯川さんのような存在を目指す若い人達にメッセージを頂けませんか？

これから音楽の世界ももっとグローバルに広がっていくと思うので、今誰も聴いていないような世界の曲、誰も知らないような世界の音楽、民俗音楽っていうか、例えばアラブの音楽だったり、イラクでどんな音楽が聴かれていたのかとか、今のラテン・アメリカあたりではどんな音楽が聴かれているのかとか、その辺をもし興味を持って聴いている人がいるとしたら面白いなあって思いますし、必ずいつか必要とされる時が来ると思いますね。

♪ 最後に、湯川さんの夢は何ですか？

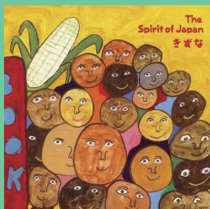
片っ端から実現してしまっているのですが、何かこれが夢でございますんっていうのは特にないんですけど、むしろ、今何が一番したいですか、みたいな、その時の目的とか道楽みたいなのはいつもありますね。来年1月にはフィリピンで日本人の男性が産み落とした日系フィリピン人の子供が2000人くらいいて、その子たちの学費とか生活とかを支えている人がマンゴの木を植えて、その収入でその子たちのために学校を作るという「マンゴの里」っていう所を見に行くんです。2月はこの前オノ・ヨーコさんが「タワー・オブ・イマジン」を建てたアイスランドに行つて、完全に地熱発電の環境を見がてらオーロラを見て、「ブルーラゲーン」という広大な野外温泉に入るのを楽しみにしています。それと、8月には「デビルマウンテン」というネイティブ・アメリカンの人たちの聖地の山があって、そこに「風の輪」っていう平和のモニュメントを建ててっていう壮大な計画があるのでそれに参加して来ます。私は「道楽」って呼んでいるんですけど、そういうその都度その都度の目標があるので、あとは憲法九条を守ることにいかしら。

【現在、ゲーターの研究家のシュタイナー教育の教材として開発されたアイリッシュ・ハーブのような楽器、ライアーも習っているという湯川さん。その飽くなき探究心とバイタリティに感服です！】



『MEGA エルヴィス』 Elvis Presley
BMG Japan: BVCP-850
¥2,548 (tax in)

湯川さんが選曲と解説を手がけた全50曲収録のエルヴィス・プレスリー・エッセンシャル・コレクション！



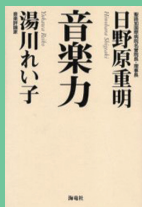
『きずな』 The Spirit of Japan
ドリーミュージック: MUCD-5099
¥1,000 (tax in)

湯川さんが作詞を担当（作曲は宮川林良）として2000人のコーラス隊による美しいコーラス曲を収録



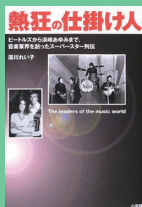
『湯川れい子のロック50年〜見た！聞いた！会った！世界のスーパースターたち〜』
シンコーミュージック ¥2,520 (tax in)

湯川さんの音楽評論とインタビューの初対面（1997年）、ビートルズ来日記（1966年）等選読満載！



『音楽力』
日野原重明、湯川れい子
海竜社 ¥1,470 (tax in)

湯川さんと日野原重明氏の音楽療効果果の対論集



『熱狂の仕掛け人』
湯川れい子
小学館 ¥1,890 (tax in)

湯川さんの音楽業界の仕掛け人達とのインタビュ集

『The Walker's』読者（1名）の方に抽選で湯川れい子さんのサイン入り書籍をプレゼント！

★送付先住所、氏名、電話番号、下記アンケートに答えて、件名に「湯川れい子さん著書プレゼント係」と明記の上、Eメール・アドレス (thewalker@k07.itscom.net) 宛てにお送り下さい。

【アンケート】

①性別 ②年齢 ③職業 ④ The Walker's をGETした場所 ⑤湯川れい子さんインタビュー記事の感想 ⑥ The Walker'sの感想 ⑦今後取り上げて欲しいアーティスト
【当選は発送にて代えさせていただきます。】

